

考古学調査報告

関西大学創立80年記念行事の一つとして、ペルーアンデスに学術調査隊が派遣されることになり私はその中の考古学班を分担することになった。

今回の調査はアンデスの中でも中央アンデスの特に大平洋岸の砂漠地帯に散在する遺跡を中心に踏査を行ない、主としてインディオの生活様式をも調査し、民族学・考古学の面から、インカ文明を観察することを基礎とした。

なにぶん今回は初の海外調査であり、現地ではあらゆる面で不十分な点が多かったが、調査期間中に1年に1回、しかもインカ時代よりその伝統を残すインカ最大の祭「インティ・ライミイ（これはケチュア語で太陽の祭）を調査することができたのは幸運であった。また 現地での発掘に参加する機会を得る事もできた。これは東京大学の卒業生で現在サンマルコス大学留学中（考古学専攻）の宮崎泰氏の好意によるもので約2週間程であったが、ペルー国での考古学発掘方法等を学ぶことができた。また ペルーには国立を含めて大小約30程博物館があるが、これらのうちリマ周辺にある博物館を廻り設備、陳列法、出土品等に重点を置いて見学した。

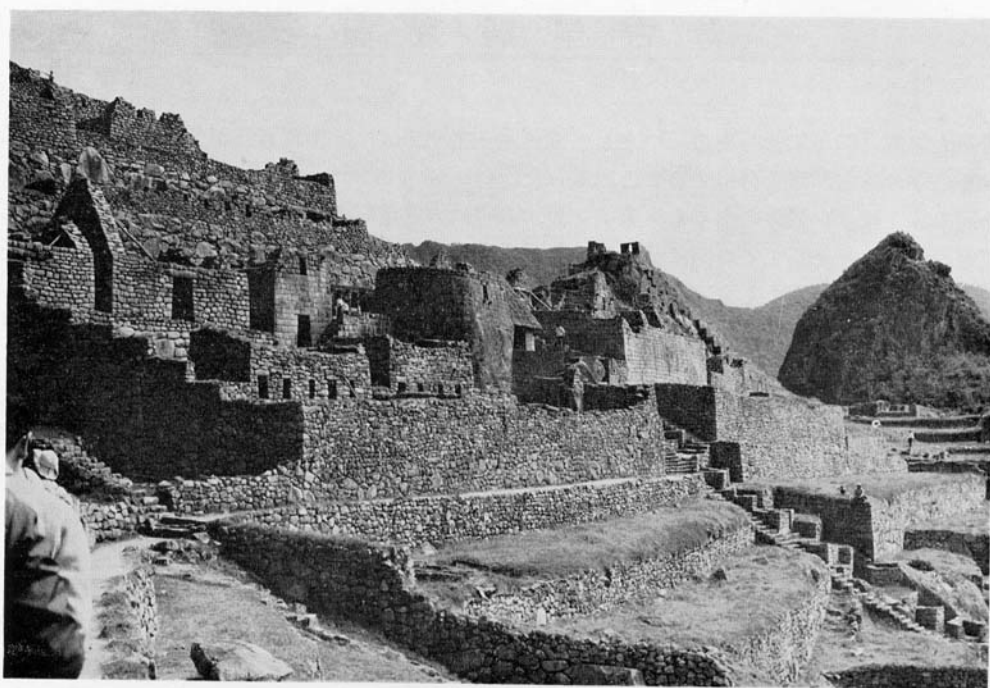
約3カ月の調査期間で決して十分な調査であったとは云えないが、ペルー在留邦人諸氏の厚い援助を受け無事に調査を終えることができた。隊長帰国のあと11月11日に船でわれわれは帰国した。以下は考古学班の行動および調査内容の概要である。

6月5日 横浜出発後1カ月ぶりに調査目的地に足を入れ、先発隊とリマで合流し、隊員全部そろった。6月11日まで出発準備を行ない、山岳班は12日にリマを出発、私もベースキャンプまで同行する。チキアン村までバスで約12時間の行程であるが、山岳地帯を走り途中4,000メートル近い峠を越え私自身もちろん初めての経験であり軽い高山病にとりつかれる。

6月15日 昨夜遅くポコパに到着しキャンプを行なったので、朝を迎えて初めて村全体をみわたすことができた。出発の10時まで時間があったので、私は一軒のインディオの家に入っておどろいた、それは入口より入ったところに、2階に上るために掛けてある梯子が何んと弥生式時代の梯子とまったく同形式のものであることであった。インディオの文化とわが国の文化との共通性を感じさせるもので、直ちに写真と実測を行った。また 室内に置かれている農具、生活用具にも古式なものがあり実測と写真をとった。村のあちこちで女性が糸をつむいでいるのが見られ、糸を巻き付けている棒の一端に円形の石がさしこまれており、これはわが国で出土する紡錘車によく似ており、その使用法を考えるうえの資料として写真と実測を行った。



6月16日午後3時 ニナコチャに着き、ベースキャンプの設営を行なった。私は24日のクスコでの太陽の祭の調査のために、1週間に2回しか来ないバスの日の関係で18日早朝に隊長以下全隊員と別かれ私とアリエロ（馬方）4名で下山し、21日夜リマにたどり着いた。6月23日朝8時にリマ空港を出発、約2時間半でインカの古代都市クスコに着いた。この飛行機での2時間は私にとって非常に長く感じ苦悶の連続であった。飛行機は古い形の小形で、しかもアンデス山脈を越えるので空気が稀薄になり酸素補給のゴム管を口に入れ、やっと苦しみに耐えた。



クスコの町は3,000メートル以上の山の中にある。先ず街の少しはずれにあるクスコ国立大学考古博物館を訪れる。建物はコの字形に造られ中央部を庭とした小さなものであるが、クスコ周辺からの出土品の殆んどが陳列され考古のみならず民俗資料まで陳列されている。クスコの街の中央広場には明日の太陽の祭のために、一部の部族が来て、踊りを披露していたので写真をとる。

6月24日 「インティ・ライミー」の日である。クスコで会った九州朝日テレビのカメラマン安部正喜氏と共に祭の行なわれるサクサウワマン（ケチュア語でワシよはばたけという意味。インカ時代の遺跡である。）広場に行ったが、すでに数千人の見物人で見る事ができない。やっと何んとかもぐりこんで見る事ができた。午前10時から祭は始まった。この祭はインカ時代の祭の現存する唯一のもので、インカ時代には月1回の祭が行なわれ、この祭は収穫祭（5月）の終わった翌月にあたり、その年にできたトウモロコシから作った「チチャ」と云う酒を太陽にささげる祭である。またこの日は南半球では冬至にあたる。私がみた時はクスコ周辺の33部族がそれぞれの衣装を付け、特有の踊りを行ないインカ初代の王マンコ・カパックがかつがれた椅子に乗り、祭壇に上りチチャを受け、またその祭壇の前で「リヤマ」と云う動物を殺し、その血をささげた。午前10時から約5時間ほど祭はつづけられた。観光化はしてはいるが、他に残らないインカ時代の祭の唯一の資料といえる。

6月26日早朝7時にクスコからディーゼルカーに乗り北に約4時間、マチュピチュ遺跡のある駅で下車し、これより遺跡まで約40分バスで急な坂道を登るとマチュピチュ遺跡の入口に着く。この遺跡は、山の中のしかも斜面の急な山頂の一边を削り築かれた遺跡で、残る遺構から一つの都市であったことがうかがえる。すべて石を積み重ねたものでその積重法には、また古墳の石室の方法と似ている所が興味深く感じた。

また この遺跡の反対の斜面は約300メートルの絶壁で、その谷間にはウルバンバ川がかすかにみられる。この遺跡の立地条件にも一つの大きな問題があるようである。

6月27日 クスコ在住の大村氏の自動車でクスコの北方約35キロにあるチンチエロと云う小さな村に行きついた。この村の中央にあるブマックカウアと云う広場では、インディオの物々交換の市

が開かれていた。私が行った時には30人あまり集って地面に座ってそれぞれ特産物を広げ交換し合っていた。交換物は食物が多く、他に織物もみられた。この市は1週間に一度開かれる。

これは古代の物々交換の方法を考える上に重要な民俗資料である。この市を調査中この村でインディオの結婚式が行なわれていることを聞き、直ちに行ったが、すでに教会での式は終わっていた。



幸い家の庭で、身内の人による祝賀会が始まる所であり、何とか調査することができた。

クスコでの調査も時間の関係で28日に終り、リマに帰った。

6月29日 リマ市の少しはずれにあるペルーでは最も優れたリマ国立人類学・考古学博物館を訪ずれる。この博物館はやはり中央に広い庭を造り、その廻りの四方に陳列室が設けられ、ペルーの代表的なものはほとんど集められ、土器・織物・石器・金属器・石造物などがいいねいに分類されていた。また設備もすぐれたもので、中庭には遺跡の模型が作られ、石造物も置かれていた。

7月1日 リマ市にあるラファエル・ラルコエレラ博物館を訪ずれる。この博物館は個人の博物館ではあるが、建物も立派なもので、室内は殆んどが土器でぎっしりと埋められ、チムー・モチーカ時代のものが多く、見るのがいやになる程集められていた。土器だけでも数千は数えられよう。7月3日朝4時にリマを出発し、チキアン村に向う。5日チキアンで隊長、近藤隊員と会いリマに帰る。

7月9日 リマ市ミラフローレス在住の考古学者天野芳太郎氏宅にて、天野博物館を見せていただく。

博物館は最近新築された立派なもので、コレクションのほとんどはまだ陳列されていないが、設備はペルーでは最高のものといえる。陳列品の中でも特に織物はこれほど集められている所は他にみられないであろう。

7月13日 隊長、近藤隊員と共に国立美術博物館に行く、美術館であり室内も広く、絵画、工芸品および考古学資料が陳列され、18～9世紀のものが多くみられる。

7月17日から約2週間、ペルー国立サンマルコス大学人類学研究室が発掘調査を行なっているウワカ・サンマルコス遺跡に参加する。人夫が3人で、小人数の発掘である。

作業は朝の7時から午後の2時までだから、作業終了後の時間を利用して周辺の遺跡と博物館を見に行くことにした。

8月3日夜8時 リマをバスで出発し、4日の朝6時にトルヒーヨに着く、ここはリマの北方にありチムー帝国の跡である。まったくやけつくような暑さで、歩くことができない程であった。先ずトルヒーヨ国立大学の博物館を訪ずれる。大学内の3室ばかりの陳列室で、大学の資料室を思わ



せる。

やはりチムー時代の土器・石器・ミイラが大部分をしめている。

午後からチムー時代の特有の形式のピラミッド型の神殿を見に出かける。トルヒーヨから東南約2キロ、砂漠の中に太陽の神殿と月の神殿が500メートル程はなれて列んで築かれており、太陽の神殿の方は全長150メートル、高さ30メートル前後の小山をな

し、すべてアドベ（日乾レンガ）で積まれているが、破壊がはげしく、一辺のみにそのピラミッド様式をうかがうことができる。この太陽の神殿の300メートルほど東には岩山を背景に少しやや小さい神殿が築かれている。これもわずかにピラミッド形式の一辺を残すだけで盗掘がひどくみられる。

8月5日朝早くから自動車です約2時間砂漠の中を通りチカマ河谷のある海岸にそったところのワカ・プリエッタ遺跡を見に行く。これは長さ20メートル前後、高さ10メートルの黒色の小山状をなすもので中央部には調査穴が大きくあけられており、魚の骨、鳥の骨などがたいせきして、日本の貝塚を思わせるものである。遺跡の上部には地下式石室状の住居跡が残っている。この遺跡よりワカ・パルティダ、ワカ・カルトリオにかけての砂漠地帯一面に墳墓の盗掘孔が数百ほどあり人骨と織物と土器が散乱している。

これ等の墳墓の遠くにはピラミッド形式の遺跡がかすんで見える。中でもワカ・パルティダとワカ・カルトリオはほぼ同じ大きさで、40メートル、高さ約20メートルのものでやはり中央には盗掘穴がありアドベがぎっしり積まれている。また トルヒーヨの街に帰り、ワカ・デ・ドラゴンに行く。

この遺跡は、一辺が50メートルの四方が高い壁でかこまれた中に神殿が築かれている。この神殿の壁にはアラベスクともいわれるうきぼりの動物？が全部えがかれ、その動物がドラゴンに似ているところから遺跡の名がつけられたらしい。現在、復元工事が行なわれている。

8月6日 町のすぐ西にあるチムー帝国の都市チャンチャン遺跡に行ったが、実に3キロ四方の広さの遺跡であり、そのほとんどは土に埋ずもれており、土壁のみがあちこちにみられ、現在一部は発掘調査が行なわれ、復元されている。神殿が4つばかり築かれていたが実にみごとなもので、やはり壁にはペリカン、幾何学的文様がみられる。

8月12日 全員リマに集結し、帰国準備を進めることになった。

久 野 邦 雄